

# 幼保小接続の実践に見る接続の促進要因と阻害要因

Promoting and Impeding Factors of Transition from Nursery to Elementary School

富山 大士<sup>i)</sup>      和田 美香<sup>ii)</sup>      原田 晋吾<sup>iii)</sup>  
TOMIYAMA, Futoshi      WADA, Mika      HARADA, Shingo

## Abstract

This study focused on Yaese Town in Okinawa Prefecture and conducted a survey to clarify the promoting and impeding factors through the analysis of group interviews with those involved in kindergarten, nursery and elementary school connections. In implementing the KAKEHASHI - Program for Kindergarten, Nursery and Elementary Schools, the promoting and impeding factors for kindergarten, nursery and elementary school connections were analyzed from the perspectives of "matters related to children's learning and life" and "matters related to the implementation of the program," which should be carried out while seeking a common understanding among all involved parties and should be improved through reflection together with stakeholders. As a result, six promoting factors and four impeding factors were identified.

キーワード：幼保小接続、促進要因、阻害要因

## 1. 本研究の背景

教育基本法および関係法令が掲げる目的及び目標の達成を目指し、その連続性・一貫性を確保しながら、組織的・体系的に教育を行うことが重要である。幼児教育施設と小学校（以下、「幼保小」という。）の間において、幼児教育と小学校教育については、子どもの発達の段階に起因する、教育の方法等に関する大きな違いが存在している。幼児期は遊びを中心として五感を働かせて様々な人・モノ・コトと直接関わる大切な時期であり、遊びを通して総合的な学びを得ていく時期である。それに対して児童期は、学ぶということについての自覚的な意識を持ち、自己の課題の解決に向けて計画的に学んでいく時期であるなどの違いがある。

このため、幼保小のそれぞれにおいてはこれらの違い等を認識しながら、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に取り組むことが求められる。幼児教育と小学校教育の方法等の違いは、子どもの発達の段階に応じたものではあるが、子ども一人ひとりの発達や学びは幼児期と児童期で明確に分かれることなく連続しており、子ども自身の混乱につながらないように、できる限り円滑な接続を

することが大切である。小学校に入学した当初の子どもにとって、小学校での学習や生活に関する理解不足や不安等を自覚して学校の担任等に伝えることは必ずしも簡単ではない。一人で戸惑いや悩みを抱えこむことにより、その後の小学校での学習や生活に支障をきたすおそれがある。そのつまずきは学びの阻害につながるのみならず、その後の不登校やいじめの要因にもなりかねず、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が重要である。

2017年（平成29年）に改訂された幼稚園教育要領<sup>1)</sup>において、「小学校教育との接続に当たっての留意事項」として、「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。」と記された。しかし、「家庭や地域の状況の違いを越えて、幼児教育施設の多様性を生かしながら、幼保小の協働により接続期の教育の充実を実現していくためには、未だ数多くの課題がある。」<sup>2)</sup>という状況が続き、文部科学省は2021年に中央教育審議会初等中等教育分科会において「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」を設置し、2021年から2022年にかけて委員会を開催し、2023年に「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について ～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」<sup>2)</sup>をまとめた。また、

i) こども教育宝仙大学 教授

ii) 東京家政学院大学 教授

iii) 東京家政学院大学 助教

「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」<sup>3)</sup>も発行した。「幼保小の架け橋プログラム」について、文部科学省は2022年度からの3年間、架け橋期のカリキュラムの開発や実施等に取り組む19の自治体を採用し、採用された自治体における取組状況や成果等に関する調査研究も併せて実施している。

架け橋プログラムの開発を進めるにあたり、無藤<sup>4)</sup>は、「幼児教育施設は小規模の施設が多く、同じ小学校の学区の中に複数の園があり、また一つの園からいくつもの小学校に進学するケースも多い」ことに触れ、全ての園と小学校との連携・交流の重要性を指摘している。都市部では一小学校区に10園以上の幼児教育施設が存在することもまれではなく、全ての園と小学校との連携・交流は確かに重要ではあるが、実際には小学校は多数の園との連携・交流を求められ、困難さが生じている場合もある。

北海道安平町(2024年4月現在、人口7,286人)においては、町内にある1か所の小学校と1か所の幼児教育施設との連携・接続をしているケース<sup>5)</sup>が報告されている。確かに小学校と幼児教育施設が1か所ずつであれば、それぞれの特性を理解しながら連携・接続はしやすいと考えられる。

山内<sup>6)</sup>は、「幼小接続が進まない理由」として、幼小に共通の知の地平がないこと、小学校における教科主義、幼小における質的教育評価の3点を挙げている。確かにそのような面はあり得るのであろう。しかし、それでも幼保小連携に取り組もうとしている自治体も多数ある。地域のネットワークを活かした保幼小接続の取り組みとして、岡花ら<sup>7)</sup>から報告されている。この研究では、元々地域の学校・園が連携しながら同じ方向を向き子どもの就学を支援する体制づくりができていた地域で、教育行政がイニシアティブをとりつつ幼保、公立私立の壁を越えヨコのつながり、そして、小学校へのタテのつながりを意識した取組みをしていったことが記されている。

本研究では、町内に4か所の小学校が存在する沖縄県の八重瀬町(2024年4月末日現在、人口32,976人)に着目し、都市部ほどの多数の園が存在しない状況下での幼保小接続の実践に着目した。その小さな町で、幼保小接続がどの程度までできるものであるかを調査し、その中で幼保小接続の促進要因と阻害要因を明らかにすることを研究目的とした。

## 2. 研究の対象と方法

### (1) 研究の対象とインタビュー調査の方法

沖縄県八重瀬町において、実際に幼保小接続に関わっている下記の6人を対象とし、6人同時でのグループイ

表1 研究対象者

研究対象者	所属	役職
Y1	八重瀬町	担当部門の課長
Y2	八重瀬町	担当部門の課員
Y3	八重瀬町	教育委員会 保幼小連携アドバイザー
Y4	八重瀬町	公認心理師・臨床心理士
A1	社会福祉法人 A	八重瀬町内の幼保連携型認定こども園 a 園長
A2	社会福祉法人 A	八重瀬町内の幼保連携型認定こども園 b 園長

ンタビューを実施した。

グループインタビュー調査は2024年8月21日に役場の会議室にて実施した。研究協力者全員に対して調査の趣旨を説明して、調査参加への承諾をいただいた。

まず、町での取り組みを町職員 Y3(保幼小連携アドバイザー) および Y4(公認心理師・臨床心理士) から概略の説明を受け、簡単な内容確認はその場で質問して確認した。その後、質疑応答の形で Y3・Y4 から聞き取りを行った。A1・A2(いずれも、八重瀬町内の幼保連携型認定こども園 a および b の園長) から、質疑応答を補足する形で具体的な取り組み例や感想等を聞き取った。

Y3 および Y4 からの概略の説明(内容についての簡単な質問時間も含め)が60分、その後の質疑応答が67分であった。

### (2) インタビュー結果の解析の方法

幼保小の架け橋プログラムの実施にあたっては、「以下のような子供の学びや生活に関することやプログラムの実施に関することについて、関係者で共通理解を図りながら進めるとともに、関係者と共に振り返りながら改善を図っていくことが重要である。」と中央教育審議会の審議まとめ「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について ～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」<sup>2)</sup>に書かれている。

### 【子供の学びや生活に関すること】

- c1) 架け橋期を通じて育みたい資質・能力
- c2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
- c3) 特別な配慮を必要とする子供を含む全ての子供のウェルビーイングへの配慮
- c4) 子供の学びにおける先生や大人の役割

【プログラムの実施に関すること】

- p1) 幼保小の連携・接続により主体的・対話的で深い学びを実現すること
- p2) 設置者・施設類型・学校種を越えた対話、協働、発信を行うこと
- p3) 実質的な話し合いや実践を重視すること
- p4) ICT やオンライン等の活用による負担軽減や時間の効率的使用を図ること
- p5) 持続的・発展的な取組とすること
- p6) 形式的な取組とならないよう、子供の姿を起点とした取組を推進すること

本研究では、これらの「子供の学びや生活に関すること」の c1) ～ c4) の 4 項目および「プログラムの実施に関すること」の p1) ～ p6) の 6 項目の合計10項目について共通理解を図りながら進めていくことの大切さを認識し、この10項目についての共通理解の形成・推進に関する「促進要因」と「阻害要因」をインタビュー逐語録から解析した。

倫理的配慮

研究目的や概要を研究対象者に伝え、園児や園職員等の個人情報特定されない形で情報を解析し、得られた知見を町に報告するとともに、結果を学外に発表することがある旨の了解を口頭で得た。語られた内容については許可をいただいて IC レコーダーに録音し逐語録を作成した。

### 3. インタビュー結果および解析・考察

解析の結果、幼保小接続の促進要因と阻害要因について、以下の表 2 に示すように、6 つの促進要因と 4 つの阻害要因の概念が抽出された。ここでそれらの概念生成の根拠となるセンテンスの例も表中に示している。センテンスの右側に“(研究協力者：促進している項目)”として書いている記号は、表 1 に示した 6 名の「研究協力者」と、2. (2) に示した「子供の学びや生活に関すること」の c1) ～ c4) の 4 項目および「プログラムの実施に関すること」の p1) ～ p6) の 6 項目の合計10項目を指している。

上記の幼保小接続に関わる 6 つの促進要因、および 4 つの阻害要因の全体をみまわしたとき、2. (2) に示した「子供の学びや生活に関すること」の c1) ～ c4) の 4 項目および「プログラムの実施に関すること」の p1) ～ p6) の 6 項目の合計10項目のうち、【プログラムの実施に関すること】「p4) ICT やオンライン等の活用による負担軽減や時間の効率的使用を図ること」につい

ては、表 2 には表れていない。今回のインタビューにおいては、ICT やオンライン等の活用による負担軽減や時間の効率的使用については語られていないことをここに言及しておきたい。

#### 3.1 幼保小接続の促進要因に関する考察

##### (1) 互いをよく知り合う

幼稚園・保育園・こども園の保育者にとって、小学校は自分の専門範囲外の組織である。一方で小学校教員にとっても、幼稚園・保育園・こども園の保育は馴染みがないものであることが多い。

組織としての付き合いがなくても、個人的な付き合いがあってよく知っている人に対しては、通常、何かと話しかけやすいものであり、連携が取りやすくなる。組織間とは言え、人と人による連携・接続であり、幼稚園・保育園・こども園の保育者と小学校教員は、互いをよく知り合うことが重要である。

##### (2) 有効な組織の形成

幼保小接続を有効に働かせるためには、その地域の公立・私立、幼稚園・保育園・こども園の種別を問わず、どこの園からその校区の小学校に行っても、しっかりと学びができることが大切である。幼保から小学校に提出する書類の様式も、同一の様式とすることで統一し、安心できる。

同じ幼保小接続プロジェクトのメンバーとして、特別支援コーディネーターや研究者も仲間に入ることが望ましい。

##### (3) 幼児教育・小学校教育の理解を互いに深める

小学校教員にとっては普段関わっていない幼稚園・保育園での体験が新鮮であり、幼稚園・保育園の保育者にとっては、小学校での子どもたちの学びの姿が新鮮であろう。幼稚園・保育園の公開保育や小学校での公開授業に積極的に参加することが、相互の理解を深める。

園の公開保育・小学校の公開授業への参加後には必ず話し合いの場を持ち、そこで子どもの育ちを話し合うことが、とても重要である。

##### (4) 有効な子ども理解の方法

幼児教育と小学校教育の考え方の違いを双方が実際に訪問して知り、参加者自身がドキュメンテーションを作成して議論することは非常に有効である。

小学校教員は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(いわゆる10の姿)」で子どもを捉えることが理解しやすいようだが、必ずしもその姿で全ての保育の姿があらわされるわけでもないの、資質・能力、5 領域等の考え方



表2 解析の結果により抽出された概念

	概念	概念生成の根拠となるセンテンス (研究協力者：促進・阻害している項目)
幼保小接続の促進要因	(1) 互いをよく知り合う	・過去、公立幼稚園は小学校と隣接。連携が取りやすい (Y3：p2・p3) ・幼保小で顔を合わせて気軽に話し合える関係性 (Y3：p2・p3) ・仲良くなると連携がうまくいく (Y3：p2・p3)
	(2) 有効な組織の形成	・どの幼保こからどの小学校に行っても同じ学びができるように (Y3：p1・p2) ・どの学校にも園から同様な様式で情報を出せる。送る側として安心材料 (A1：p2・p3・p6) ・幼保こ小含めて、プロジェクトチームを率いて3年計画の事業 (Y3：p2・p5) ・今年は、特別支援コーディネーターも仲間に入っていた (Y3：p1・p2・p3) ・大学の先生に指導・助言をお願いする (Y3：p2・p3)
	(3) 幼児教育・小学校教育の理解を互いに深める	・公開の保育・授業の参加後は必ず協議。子どもの育ちを話し合う (Y3：c1・c2・c3・c4・p1・p2・p3・p5) ・遊びの中の学びの視点は、幼保側から学校と相談。そこから協議 (Y3：c1・c2・p1・p2・p3) ・毎年事例集を出して、アプローチカリキュラムを紹介 (Y3：p1・p2・p5) ・公開保育までの事前準備 (Y3：c1・c2・c4・p1・p2・p3・p6) ・小1の担任と保育者が相談して、タブレットについて (Y3：p2・p3・p5) ・スタートカリキュラムについて一緒に資料を作り、保護者に見せる (Y3：c1・c4・p1・p2・p3・p5)
	(4) 有効な子ども理解の方法	・園での遊びの経験から子どもたちがどんな学びをしているか、参加した先生方がドキュメンテーションを作成して議論する (Y3：c1・c2・p1・p2・p3・p6) ・保育の場面でも、小学校の授業でも「子どもの理解」が最初のスタート (Y3：c1・c2・c3・p6) ・小学校教員は10の姿がわかりやすそう。資質・能力等も使い理解 (Y3：c1・c2)
	(5) 要配慮児への対応	・気になる子たちでもう申し送りはそこからもう始まっていると考えられています。ここにある発達支援シートは心理士を中心に作成 (Y3：c3)
	(6) 持続的・発展的な取り組み	・公立小学校とこども園・保育園とで輪番制で公開授業・公開保育 (Y3：p1・p2・p3・p5) ・幼児教育側も小学校側も意見を言えるようになったのは、これまでの積み重ねによる (Y3：c1・c2・c4・p1・p2・p3・p5)
幼保小接続の阻害要因	(1) 幼児教育の適切ではない理解	・小学校の前倒しをしているのではないかと幼児教育側の不安もありますし、小学校側もそれを求めているところもある (Y3：c1・c2・p1・p2) ・幼稚園の現場では、遊んでばかりいるという捉え方、遊びの中でどんな学びがあるのかということろを小学校に伝えるのが難しかった (Y3：c1・c2・p1・p2)
	(2) 教科書に囚われた授業	・教科書だと内地の秋なんです。いちようがあったりどんぐりがあったり。でもここ沖縄ではそういうことがなくて (A1：c4)
	(3) 接続について狭い理解	・接続とか連携ってなると、5歳児と1年生の先生だけのものになってしまうというのがやっぱり課題 (Y3：p1・p2)
	(4) 小学校内部の課題	・周囲のクラスとの差、学年主任との意見調整、進路等の考慮 (Y3：p6)

を用いた保育の整理をすることも有効である。

#### (5) 要配慮児への対応

心理士を中心に作成した発達支援シートの活用は、要配慮児の特性の伝達において非常に役に立つ。

#### (6) 持続的・発展的な取り組み

公開保育・公開授業といった企画を長期にわたって輪番で続けていくことにより、幼稚園・こども園と小学校とが相互に理解し合い、互いに意見を言いやすくなる。

広報やえせ2024年11月号<sup>8)</sup>には、「保育園・こども園・小学校の合同研修会 ～ひとつの単元を保育者と小学校

教諭の協同で授業をつくってみる～」という企画が掲載されている。「1年生『せいかつ』の教科書の『きせつとなかよし あき』の単元を保育者と小学校がひとつの授業をつくることを通して、幼児期の経験を小学校の学びにつなげるカリキュラムづくりを構想することを目的として取り組みました。小学校に合わせるのでもない、また、逆に保育園やこども園にあわせるのでもない、子どもの経験から出発したワクワクする実践を組み立てました。」と書かれている。これは、“(3) 幼児教育・小学校教育の理解を互いに深める”が深まってきたからこそできる発展的な挑戦であると言える。

### 3.2 幼保小接続の阻害要因に関する考察

#### (1) 幼児教育の適切ではない理解

幼児教育は遊びを通じた総合的な指導によるものであり、小学校教育のように各教科等の目標内容に沿って選択された教材による授業とは根本的に異なる。

幼児教育は遊びの中に学びがあることが特徴であり、特定の科目のスキルを伸ばすこと等が目的ではない。時に、小学校教育の前倒しをするべきではないかという声が保護者等から出ることもあるかもしれないが、小学校教育以降の学びを支える根幹の時期としての幼児教育を、小学校教員も保育者もしっかりと理解しておく必要がある。

#### (2) 教科書に囚われた授業

沖縄では、本州のように秋の自然としてイチョウやどんぐりがあるわけではない。授業において教科書を尊重することは大切であるが、教科書を教えることが全てと考えるべきではない。教科書を教えることが小学校教育の目的なのではなく、子どもの姿、そして地域の様子をよく観察し、子どもや地域の実態に合った教育をすることが大切である。

#### (3) 接続について狭い理解

文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム」<sup>2)3)</sup>においては、幼保小という異なる施設類型や学校種にまたがる5歳児から小学校1年生までの2年間を「架け橋期」と称して焦点をあてているが、子どもの育ちは当然ながら連続であり、小学校1年生になるにあたっては、保育所・幼稚園等における5歳児以前の乳幼児期の学びも積み重なっているものである。文部科学省のいう「架け橋期」に強く囚われすぎることなく、乳幼児期からの連続した発達を見据えた幼児教育をするように心がけたい。

#### (4) 小学校内部の課題

小学校においても子どもの姿に合った教育をすることはもちろん大切であるが、同じ学年の周囲のクラスとの差が生じることが問題となる場合があるだろう。また同じ学年の担任同士の教育的な意味合いでの意見調整との兼ね合いで、必ずしも十分に子どもの姿に合った教育をすることができない可能性はある。

「個別最適な学び」の重要性が語られる現在であり、学校内部の組織的な話題は、本来、何らかの手段で解決し、真に子どもの姿に合った教育をすることが望ましい。

## 4. まとめ

本研究では、町内に4か所の小学校が存在する沖縄県

の八重瀬町に着目し、都市部ほどの多数の園が存在しない町の状況下での幼保小接続実践に関するインタビュー解析を通して、幼保小接続の促進要因と阻害要因について調査した。

解析の結果、幼保小接続の促進要因と阻害要因について、以下の6つの促進要因と4つの阻害要因の概念が見いだされた。

#### 幼保小接続の促進要因

- (1) 互いをよく知り合う
- (2) 有効な組織の形成
- (3) 幼児教育・小学校教育の理解を互いに深める
- (4) 有効な子ども理解の方法
- (5) 要配慮児への対応
- (6) 持続的・発展的な取り組み

#### 幼保小接続の阻害要因

- (1) 幼児教育の適切ではない理解
- (2) 教科書に囚われた授業
- (3) 接続について狭い理解
- (4) 小学校内部の課題

本研究にて明確化された促進要因・阻害要因を念頭に、各地域にて、今後の幼保小接続をより有効なものにしていくことを期待したい。

## 謝辞

調査の実施にあたり、ご協力を賜りました八重瀬町の先生方に厚く御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2017)「幼稚園教育要領」フレーベル館
- 2) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 (2023)「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/mext\\_00003.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/mext_00003.html)
- 3) 文部科学省 (2023)「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)」  
[https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt\\_youji-000021702\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf)
- 4) 無藤隆 (2023)「保幼小の架け橋に向けて」『発達』173号, pp.2-12 ミネルヴァ書房
- 5) 安平町「早来地区義務教育学校と安平の教育～はやきた子ども園編～」  
<https://www.town.abira.lg.jp/kosodate/asobimanabi/>

gakko/1460 (2024年11月11日確認)

- 6) 山内紀幸 (2024) 「幼小接続はなぜ進まないのか? —国際バカロレア (PYP) の日本への導入から見える根本問題—」 広島大学幼年教育研究年報 第45巻 pp.13-20
- 7) 岡花祈一郎・国吉和美・長嶺久美子・仲村小百合・永山勝幸・猶原和子・佐藤寛子・塚原健太 (2023) 「地域ネットワークを活かした保幼小接続の取組み—沖縄県八重瀬町保幼小連携プロジェクトの成果と課題—」 琉球大学教育学部紀要102 pp.85-97
- 8) 研究主題「やってみないと心が動く保育・授業づくり」, 令和6年度八重瀬町保幼小連携「架け橋プログラム」～保育園・こども園の育ちと学びを小学校につなげよう～ (2024) 広報 やえせ2024年11月号

#### 付記

本研究は JSPS 科研費20K02707の助成を受けたものです。